



## 2010年 年頭にあたって

1月4日(月)午後3時から、放送センターBスタジオにおいて、恒例の「2010年新春パーティー」が行われ、(株)TBSホールディングス社長、(株)TBSテレビ社長がそれぞれ新年の挨拶を述べました。

### <TBSホールディングス 財津社長>

皆様、あけましておめでとうございます。年末年始の番組に携わった方、大変お疲れさまでした。TBSグループは、昨年4月に認定放送持株会社化し、放送事業を中核に据えたメディアグループとして新たなスタートを切ったわけですが、経済環境の悪化も相俟って大変大きな試練の年となりました。今年は体制を立て直し、グループ全体がより一層結束・連携を強め、飛躍に向けた挑戦の年にしたいと考えています。

今年は1960年にTBSが東証一部に上場して、名称もそれまでの「ラジオ東京」から「東京放送・TBS」に変更してちょうど50年になります。50年以上にわたって本業を守ってこれたということは、ある意味この業界は恵まれていたというべきかもしれませんが、その反面、時代や環境の変化に対してやや腰が重かったとも言えるように思います。

50年前からTBSグループを構成している会社は(株)TBSサービス、(株)TBSビジョン、(株)日音など数えるほどしかありませんが、いまや関連会社の数は70社を越え、その従業員は6,300人を越えています。グループの中核である皆さんには、是非これだけの規模の会社と社員の牽引車として、グループを引っ張っていることを改めて認識し、そして自覚していただきたいと思います。グループの機関車役として、時代の変化に対応し、失敗を恐れず、挑戦していただきたいと思います。

暮れに、我々TBSの先輩であるテレビ草創期の音楽プロデューサーを描いた、なかにし礼さんの小説を読みました。これには井上会長をはじめ、先輩の方々が実名で登場し、それだけでも人間関係が興味深いところがあります。この中で描かれている主人公は、今ならコンプライアンス上許されないような仕事のやり方もあったのですが、主人公に限らず、当時の先輩たちの持つ、放送に対する熱意・熱気が伝わってきて、光り輝いて見えました。私は我々が持つ放送に対する熱意は今も変わるものではないと思っています。この熱意を持って、放送事業に資源を集中し、視聴者、聴取者に信頼され愛される番組を送り出していくことに全力を投入していくことが、今我々が目指すところでもあります。

また、こうした熱意の実現に向けて、昨年秋には、ホールディングスとテレビ社とが一緒になって、「活性化推進プロジェクト」を立ち上げました。今度の4月編成に向けた番組の強化と視聴率の向上、収益の向上、さらにはグループ全体の活性化を目指したものです。暮れにプロジェクトチームから中間報告をいただきましたが、それが新しい編成や番組を生んだり、今年の夏サカスを目指したグループ挙げての新しいイベントという

形で結実したり、仕事の仕方が良くなったりと、それぞれの場でつながっていくことを期待しています。

また一方で、グループ内にはいろいろな会社、いろいろな仕事をしている方々がいるわけですが、グループが今後勝ち抜いていくためには、時代の変化に対応した柔軟性を維持し、それぞれが何をすれば全体に貢献できるのか、まさにオール TBS の精神で仕事を進めていただく必要があります。上からの命令や指示を待つのではなく、それぞれのポジションで責任を自覚し、自分なりの創意工夫をして、ベストを尽くすことが重要です。

また放送事業を中核としたグループではありますが、我々自身が環境によって変化を遂げていくことも大切ですし、放送事業の安定性、自立性を確実なものにするためにも他の分野に事業を広げていくことも必要です。TBS グループには大変優秀で、元気な人が揃っています。今年も明るく、元気に、失敗を恐れず、あらゆる面で挑戦して欲しいと思います。

昨年の名作ドラマ『JIN－仁－』には珠玉のセリフがちりばめられていますが、「神は乗り越えられない試練は与えない」というセリフがありました。神頼みでなく我々の手でこの試練を乗り越えていきたいと考えています。

### <TBS テレビ 石原社長>

皆さん、あけましておめでとうございます。『日本レコード大賞』『Dynamite』『ニューイヤー駅伝』など年末年始の特番に携わった皆さん本当にお疲れ様でした。視聴率も『Dynamite』が 16.7%と紅白を除くと民放トップと大変健闘してくれました。現場で頑張ってくれた皆さんに改めて感謝いたします。この勢いをさらに高めて、今年はなにがなんでも上位を目指して、皆さんと共に頑張りたいと思います。

ところで、政治の世界も、経済構造も大きな転換期を迎えています。それに加えて放送業界は、より厳しい状況にあることは皆さんご承知の通りです。我々の業界は国内で放送業を中心として業績を上げていかなければならないわけで、これまで以上に大胆に意識改革、体質改善を推し進めていかなければならないと思っています。いずれにしても、放送局にとってはコンテンツが命であります。こうした厳しい時こそ、「最大よりも最良のメディアを目指せ」という創業時の志を忘れず、初心にかえって、番組作りをしていく事が何よりも大事だと思っています。折りしも、今年がテレビ放送開始から 55 年、来年は会社創立 60 周年という、大きな節目の年を迎えます。創業時の原点に立ち戻り、放送局の基軸である、報道情報とエンターテインメントの二本柱で、内容、視聴率ともにトップを目指し、今年を躍進の年にしなければならぬと、新春にあたり決意を新たにしているところです。

TBS は、昨年「おくりびと」で日本映画史上初のアカデミー賞を獲得しましたし、『官僚たちの夏』も芸術祭テレビ部門で優秀賞を受賞することが出来ました。そしてドラマ『JIN－仁－』は視聴率、内容共に高い評価を頂き、『ひみつの嵐ちゃん！』も安定した視聴者の支持を得る等、明るい兆しも見えてきています。昨年一年間の視聴率ベスト 10 には内藤亀田戦をはじめ、TBS の番組が 5 本も入っています。私は現場の皆さんのポテンシャルは非常に高いと確信しています。こういう時ですから、焦らず自信を持って、視聴者の皆さんに信頼され、愛される放送局を目指して共に頑張っていきましょう。関係各社の皆様も今後とも何卒TBSテレビのご支援、ご協力の程宜しくお願いいたします。

以上